伝統離れの「乳離れ」，伝統継承の「初産」

～語形のゆれに関する調査（平成 22年 2月）から②～

メディア研究部（放送用語）太田眞希恵

平成22年2月に行った語形のゆれに関する調査について，先月号に引き続き，顕著な傾向が表れたものについて報告する。先月号では連濁について報告したが，今号で取り上げるのは漢字語の読み方や外来語の発音についてである。

なお，今回行った調査の概要と，全項目および単純集計表は先月号に掲載してあるので，そちらを参照されたい。

1.“伝統離れ”が進む「乳離れ」

1.1. 伝統的な「チ～」，新しい「チチ～」

「乳」という漢字には音読みは「ニュウ」，訓読みは「チチ，チ」があり（常用漢字表内），「乳～」「～乳」という和語の中には「乳」を「チチ」と読む語も「チ」と読む語もあるし，また，「チチ・チ」両方の読み方をもつ語もある。『大辞林 第3版』に掲載されている「乳～」ということばから，「乳」を「チチ，チ」の両方で読むことばを拾ってみると次のことばがある。

乳金物（チチカナモノ／チカナモノ*）
乳草　（チチクサ*／チグサ）
乳首　（チチクビ／チクビ*）
乳汁　（チチシル／チシル*）
乳離れ（チチバナレ／チバナレ*）
乳貰い（チチモライ*／チモライ）
*印は『大辞林 第3版』で主見出しのもの

今回の調査では，このうち「乳離れ」について「チチバナレ」と読むか「チバナレ」と読むかをたずねた。

「チチ（乳）」とはもともと「チ（乳）」を重ねた語であるから，語としては「チ」のほうが古い。「チチバナレ／チバナレ」でも「チバナレ」のほうが伝統的な語形で，『日本国語大辞典 第2版』には，17世紀後半の用例が掲載されている。また，現在では「乳離れ（チチバナレ／チバナレ）する」というサ変動詞で使われることが多いが，もともとは「チバナル」「チバナレル」という動詞があり，これも『日本国語大辞典 第2版』に17世紀後半の用例が掲載されている。

では，「チチバナレ」という語形はいつごろから出てきたのだろうか。「チチバナレ／チバナレ」が国語辞典などの辞書類にどう掲載されてきたかを**表1**と25ページの**表8**[1)]で見てみる。古い辞書では「チバナレ」のみが掲載されていて，「チ

表1　チチバナレかチバナレか
（辞書類での扱い／全 58 冊）

	戦前・戦中	戦後昭和	平成
チチバナレ	2 [0]	3 [0]	10 [1]
チバナレ	29 [28]	10 [9]	12 [11]

戦前・戦中：江戸時代から昭和 20 年の間に発刊された辞書（対象 35 冊）
戦後昭和：昭和 21 年から昭和 63 年の間に発刊された辞書（対象 11 冊）
平成：平成になってから発刊された辞書（対象 12 冊）
※『NHK アクセント辞典』は対象外。
※数値は，主見出し・空見出しや「～とも言う」など，何らかの形でその語形が掲載されている辞書の数を表す。両方の語形が掲載されている場合，それぞれにカウントしてある。カギカッコ（[ ]）内は，そのうち主見出しとして掲載されている辞書の数。
※以降の表 2，表 4 ～7も同じ。

チバナレ」が表8で初めて登場するのは昭和初めの和英辞典である。国語辞典に掲載されるようになるのは1960年代以降になってからだが，その後も主見出しとしては，やはりほとんどの辞書が「チバナレ」という伝統的な語形を採っている。

このことばについて，NHKでは以下のように扱ってきた。

『NHKアクセント辞典』(1943)(1951)
　チバナレ
『NHKアクセント辞典』(1966)(1985)(1998)
　チバナレ　(チチバナレ)

1943(昭和18)年版と1951(昭和26)年版のアクセント辞典では「チバナレ」のみだったが，1966(昭和41)年版以降はカッコ(　　)付きで「チチバナレ」も掲載するようになった[2]。

1.2. 今回の調査結果

今回の調査では以下のような結果となった。

「この子は乳離れが遅い。」
　チチバナレ・・・・86%
　チバナレ・・・・・13%[3]

全体としては「チチバナレ」と発音する人が8割を超えていて，伝統的な語形「チバナレ」からの“伝統離れ”が進んでいることがわかる。

以下，これを詳細に見ていく。まず年代差である。どの年代も「チチバナレ」が圧倒的に多く「チバナレ」が少ないという点は共通しているが，若年層～中年層と，高年層とでは違いが見られる。20～40代の各年代では「チチバナレ」が90%以上であるのに対し，50代では86%，60歳以上では76%にとどまり，高年層には伝統的な語形「チバナレ」が比較的残っていることがわかる。特に，60歳以上の女性では25%が「チバナレ」である**(図1)**。

地域差では，甲信越・北陸・関西・四国で新しい語形「チチバナレ」が90%以上である一方で，東北では73%にとどまる結果となった[4] **(図2)**。

図1　チチバナレかチバナレか(年代別)

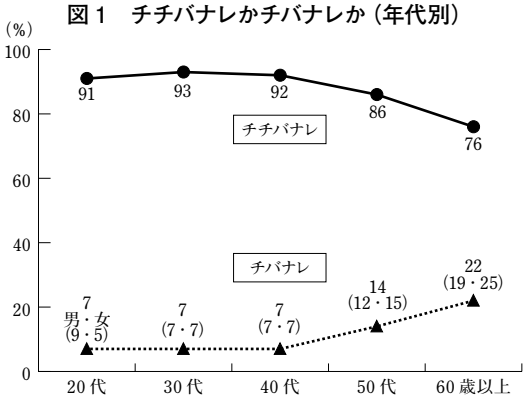
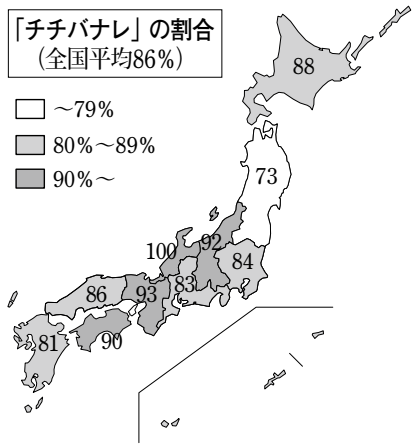


図2　チチバナレかチバナレか(地域ブロック別)



この語については，過去にNHK放送文化研究所で行った調査結果がある。今回の調査とは方法が違うため単純に比較することはできないが，有識者・大学生・高校生・NHKアナウンサー(計820人)を対象に行った「発音のゆれアンケート」(1983年12月から1984年1月)では，比較的高年層の多い有識者が「チチバナレ56%，チバナレ44%」であったのに対し，若年層の大学生と高校生はそれぞれ「チチバナレ95%・94%，チバナレ 5%・4%」であった(菊谷彰(1984))。

1.3.「離乳・断乳・卒乳」が後押しした「乳離れ」の“伝統離れ”

ところで,「乳離れ（チバナレ）」とは「①乳児が成長して乳を飲まなくなること。離乳。ちちばなれ。②自立した，一人前の大人になること。親離れ。」（『大辞林 第3版』）である。このうち①の語釈にもある「離乳（リニュー）」ということばは，ある時期から「乳離れ」にとって代わって使われるようになった。ここでは，「離乳」および似たような意味で使われる「断乳（ダンニュー）」「卒乳（ソツニュー）」ということばと，「乳離れ」ということばとの関係について考え，「乳離れ」の“伝統離れ”が起こった理由について探ってみたい。

『日本国語大辞典 第2版』に掲載されている「離乳」の用例のうち，もっとも古いのは1872（明治5）年に発行された医学用語集『医語類聚』のものである。「Ablactatio[5]」の訳語として掲載されているところを見ると，「離乳」は，訳語としてできた医学用語だったようだ。「離乳」が一般の辞書に掲載されるようになったのは昭和初期からで，その後，昭和20年以降はすべての辞書に「離乳」が掲載されるようになり（p.25表8参照），そのほとんどの語釈には「ちばなれ」または「ちちばなれ」とある。

そして1961（昭和36）年発行の『離乳と離乳食（主婦の友シリーズ38）』という本には，「離乳というのは，古いことばでいうと「乳ばなれ」であり」との記述があるように，昭和30年代には，この「離乳」が「乳離れ」にとって代わり，日常生活においてより多く使われるようになったようである[6]。

しかし，昭和30年代以降の「離乳」ということばは，伝統的に使われてきた「乳離れ」とまったく同じ意味で使われているわけではない。というのも，「乳離れ」が文字どおり“（母乳を分泌する）「乳房」から離れること”であったのに対し，「離乳」は1958（昭和33）年4月に文部省離乳研究班によって下記のように定義され，“母乳だけでなく人工栄養のミルクなどを含む「乳汁」から離れること”を指すようになったからである。

> 「離乳とは…乳汁のみで栄養されている乳児に種々の半固形食を与え，次第にその硬度と量を増して，幼児の固形食形態に達せしめることをいう。[7]」

しかし一方で,「乳離れ」が指していた「乳房」から離れるという意味だけのことばがやはり必要であったのだろう。その後，育児書などでは「断乳」，さらに「卒乳」ということばも使われるようになり[8]，このうち「断乳」は1976（昭和51）年以降は母子健康手帳にも登場して，「離乳」とともに同じページに並んで記載されることもあった[9]（**資料1**）。

資料1

平成13年発行の母子手帳。「離乳」完了と「断乳」完了の確認が，ともに記載されていた。

このように，「乳離れ」に代わって使われるようになったことば「離乳」「断乳」「卒乳」は，母子保健や育児の分野で重要なことばとなって頻繁に使われるようになった。また，その意味や使い方は時代とともに変わるなどゆれ動いてきた。このような状況において，昭和30年代にすでに「古いことば」とされていた「乳離れ」は，もはや使われなくなったにちがいない。「乳離れ」ということばそのものが日常生活から姿

を消す中で,「チバナレ」という伝統的な発音は受け継がれることなく，次第に「チチバナレ」という新しい語形で発音する人が増えた。それが，このことばの“伝統離れ”を後押しする要因になったのではないだろうか。

2.“伝統継承”の「初産」

2.1. 語の歴史と調査結果

「乳離れ」では“伝統離れ”が進む一方で，伝統的な語形が継承されているのが「初産」である。

「初産」には，「ウイザン」「ショサン」「ショザン」「ハツザン」と4とおりの読みがあるが，このうち「ウイザン」がもっとも古い伝統的なことばである（**表2**/p.25表8参照）。

表2　ウイザンかショサンかショザンかハツザンか（辞書類での扱い／全58冊）

	戦前・戦中	戦後昭和	平成
ウイザン	29［25］	11［11］	12［11］
ショサン	13［4］	10［4］	9［6］
ショザン	1［0］	7［4］	10［5］
ハツザン	19［7］	11［9］	12［11］

※数値は，その語形が掲載されている辞書の数。
カギカッコ（［ ］）内は，そのうち主見出しでの掲載数。（詳細は表1の欄外参照）

一方，NHKではこのことばの読みについて，下記のように扱ってきた。

『NHKアクセント辞典』（1943）
　ウイザン
『NHKアクセント辞典』
（1951）（1966）（1985）（1998）
　ウイザン　ハツザン [10)]

1943年版には「ウイザン」のみが掲載されていたが，1951年版以降は「ウイザン」と「ハツザン」が同等に掲載されるようになった。また，「ショサン」「ショザン」は掲載されていないが，1985年版以降「ショサンプ」という語は掲載されている。

今回の調査結果は以下のとおり，「ウイザン」が8割を超えた。

「初めて子どもを生むことを『初産』と言う。」
　ウイザン・・・・・84%
　ショサン・・・・・7%
　ショザン・・・・・4%
　ハツザン・・・・・2%

これを年代別に見てみると，30代から50代では「ウイザン」がおよそ9割だが，20代と60歳以上では8割以下であることがわかる（**図3**）。

また，地域別に見たのが**図4**であるが，「ウイザン」は東北（57%）で低く，関西（92%）・中国（95%）・四国（95%）で高い。

図3　ウイザンかショサン／ショザンかハツザンか（年代別）

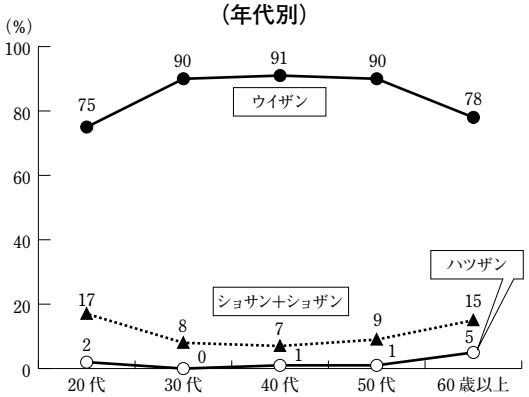
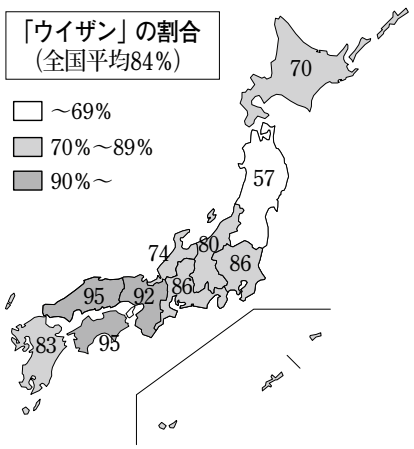


図4　ウイザンかショザンかハツザンか（地域ブロック別）



2.2.「ウイザン」と「ハツザン」～その違い～

「ウイザン」は，「初」の訓読み「ウイ」と「産」の音読み「サン（ザン）」とが組み合わさった「湯桶読み」のことばである。「初（ウイ）～」ということばはほかに「初冠（ウイコーブリ／ウイコームリ／ウイカムリ）」「初琴（ウイゴト）」「初陣（ウイジン）」「初孫（ウイマゴ）[11]」「初奉公（ウイボーコー）」などがあるが，この「ウイ」には，「初」の音読み「ハツ」「ショ」とは若干違う意味が含まれる。『日本国語大辞典 第2版』と『言葉に関する問答集 総集編』にはそれぞれ以下のように記されている。

> 「「うい」は「生まれて初めて」の意。これと類義の「はつ」は，ある一定の周期ごとの初回，たとえば，一日，一年などにおける最初の意であることが多い。」
>
> （『日本国語大辞典 第2版』）
>
> 「「うい」は「初めての，最初の，生まれて初めて」の意を添える成分で（中略）「事に当たって初心で，不慣れでぎごちない」というのが，もとの意味である。」
>
> （『言葉に関する問答集 総集編』[12]）

つまり，「ウイザン」ということばは，「初めてのお産」の意味ではあるが，同じ意味の「ショサン」「ショザン」「ハツザン」に比べると「生まれて初めて」で「不慣れでぎごちない」というニュアンスが含まれたことばだと言える。また，『日本国語大辞典 第2版』の「うい（初）」の項目には，第2の意味として，「「ういざん（初産）」の略」とあり，17世紀後半の用例が載っている。

一方，「ショサン」「ショザン」は学術用語からの読みと言えるかもしれない。『学術用語集』を調べると「ショサン」「ショザン」そのものはないのだが，医学編に「初産婦（ショサンプ）」，動物学編に「初産雌（ショザンメス）」という用語がある。「初産婦（ショサンプ）」は「経産婦（ケイサンプ）」に対することばであり，『南山堂医学大事典 第18版』（1999）には「経産婦は分娩所用時間が初産婦に比し約1/2と短く，分娩経過は順調なものが多い」とある。これは言いかえれば，「初産婦は分娩所用時間が経産婦に比べると約2倍かかり，分娩経過が順調でない場合がある」ということである[13]。

ここで「初産」ということばをタイトルにした書籍を見てみる。**表3**は国立国会図書館の蔵書のうち，「初産」ということばがタイトルに入った書籍を調べてまとめたものである[14]。1960年代から2000年代まで10冊の書籍があるが，注目すべきは，書籍のタイトルに入っている「心得」

表3　タイトルに「初産」がつく書籍

書籍名	出版年／著者／出版社
初産の心得と育児　無痛分娩　（家庭医学新書 3）	1962／矢口英徳／東栄堂
わかりやすい初産の心得と育児法	1962／秋葉敏子／協文社
30 歳すぎてから初産する人のために	1964／宮下祥／日本文芸社
初産の心得と育児　はじめてお産をする若い女性の為に	1969／矢口英徳／東栄堂
初産の不安をなくす本	1983／山田文夫／ひかりのくに
イラスト版 30 歳からの初産	1984／雨森良彦／学陽書房
初産の安心百科	1986／雨森良彦・柴田道子／大泉書店
30 歳からの初産　40 週の時間（とき）の祭り	1988／企画社編集部（編）／企画社
初産の母親の育児におけるストレス対処と対児愛着感情の形成に関する基礎的調査	2008／福澤雪子
40 代初産をはじめた女性たち	2006／新井容子／情報センター出版局

国立国会図書館HPの蔵書検索・申込システム（NDL - OPAC）で「和図書」を検索し，原本を確認のうえデータを一部修正しまとめたもの。

「わかりやすい」「不安」「安心」「ストレス」ということばである。これらの書籍の多くが，「生まれて初めて」の「不慣れでぎごちない」お産（＝ウイザン）を迎える人のために，「わかりやすい」「心得」を説くことでその「不安」や「ストレス」を取り除き，「安心」してお産に臨むことができるようにと書かれたものだということがわかる。

かつて，お産はともすれば母親自身も命を落とすことの多い一大事であった。特に分娩時間が長くかかり経過も順調でないおそれのある初産婦にとっては不安もさぞかし大きかったことだろう[15]。母子保健医療が発達した現代では，妊産婦死亡率は大幅に下がり命を落とすことこそ減ったが，一方で，1人の女性が生む子どもの数は減り続けている。人生において出産を1度しか経験しないという女性が増え，「初産」はかつてとはまた違う意味で人生の一大事となっている。その人生で初めての特別なお産には，やはり「生まれて初めて」で「不慣れでぎごちない」という意味が含まれる「ウイザン」という響きが好まれるのではないだろうか。

時代は変わっても，人生において初めてのお産は不安を伴うものであることは変わらない。それゆえ，「ウイザン」という語形は数百年の時を越え，伝統的な語形が受け継がれてきているのかもしれない。

3.「精霊流し」は「ショーローナガシ」？

3.1. 辞書では「ショーリョーナガシ」調査結果は「ショーローナガシ」

「精霊流し」とは，「盆の終わりの精霊送りの日に，供物などをわらや木でつくった舟にのせ，海や川に流す行事」（『日本国語大辞典 第2版』）である。

『NHKアクセント辞典』では1943年版から一貫して「ショーリョーナガシ」のみを採っているほか，ほとんどの辞書が「ショーリョーナガシ」を主見出しにしている（**表4**/p.25表8）。

表4　ショーリョーナガシかショーローナガシか（辞書類での扱い／全58冊）

	戦前・戦中	戦後昭和	平成
ショーリョーナガシ	3 [3]	10 [10]	11 [11]
ショーローナガシ	0 [0]	1 [0]	3 [0]

※数値は，その語形が掲載されている辞書の数。
カギカッコ（[ ]）内は，そのうち主見出しでの掲載数。（詳細は表1の欄外参照）

「精霊」ということばは，「セイレイ」と読む場合もあれば「ショーリョー」と読む場合もある。「セイ」「レイ」はそれぞれ「精」「霊」の漢音であり，「ショー」「リョー」はそれぞれ「精」「霊」の呉音であることからも「ショーリョー」のほうが古くから使われている語であることがわかる。また，国語辞典を調べると「精霊（セイレイ）」が「①死者の霊魂。②山川・草木など種種の物に宿ると考えられる神霊。精。」（『新明解国語辞典 第6版』）という意味で一般的に用いられるのに対し，「精霊（ショーリョー）」は盆の行事に関連する下記のことばや，盆で迎える死者の霊を限定的に指すことばとして使われていることがわかる。

> 精霊市（ショーリョーイチ），
> 精霊会（ショーリョーエ），精霊送り，
> 精霊棚，精霊箸，精霊花，精霊火，
> 精霊舟（船），精霊祭り，精霊迎え，
> 精霊飯（ショーリョーメシ）[16]

以上のように，辞書を中心とするこの語の読みは「ショーリョーナガシ」であるのだが，今回の調査は以下のとおり，辞書に掲載されてい

ない「ショーローナガシ」が7割を超える結果となった。

「お盆に精霊流しをする。」
ショーリョーナガシ ・・・・20%
ショーローナガシ・・・・・76%

これを年代別に見たものが**図5**である。「ショーローナガシ」のグラフは40代がもっとも多い山型を描いている。

また，地域別では**図6**のように，「ショーローナガシ」が，北陸で66%である一方で，北海道・甲信越・九州で80%以上であった。

図5　ショーリョーナガシかショーローナガシか（年代別）

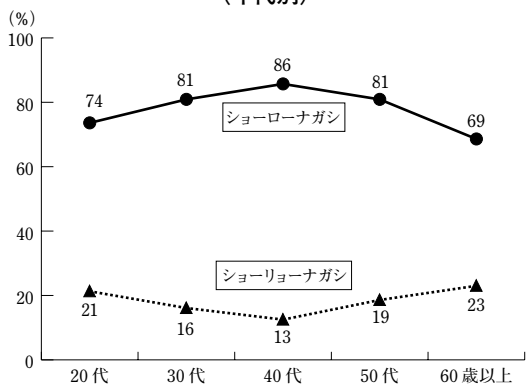
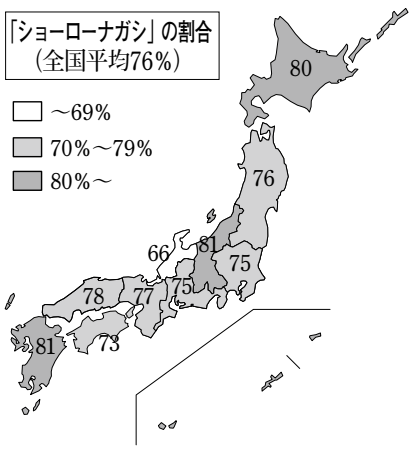


図6　ショーリョーナガシかショーローナガシか（地域ブロック別）



3.2.「ショーローナガシ」7割の背景 ～仮説① メディアからの影響～

ところで，「霊」という漢字に「ロー」という読みはないにもかかわらず「ショーローナガシ」という読みが全体で7割以上にもなるのはなぜだろうか。ある年代以上の人がすぐに思い当たるのは，さだまさし氏が作詞・作曲したフォークソング「精霊流し」であろう[17]。1974（昭和49）年にヒットし，その年の日本レコード大賞で作詞賞を受賞したこの作品は，さだ氏自身の思い出をもとに，出身地・長崎で毎年盛大に行われる行事「精霊流し」をうたったものである。

長崎での「精霊流し」は，新盆を迎えた人の霊を精霊船に乗せて爆竹のにぎやかな音とともに送る伝統行事で，その発音は「ショーローナガシ」である。もちろん，さだ氏の歌う曲のタイトルも「ショーローナガシ」で，歌詞でも「精霊流し（ショーローナガシ）が華やかに始まるのです」と歌われている。

さだ氏はその後，2001（平成13）年には小説「精霊流し」を発表。この小説は，翌2002年にはNHKでドラマ化され夜の連続ドラマ「精霊流し～あなたを忘れない」が放送されたほか，2003年には映画「精霊流し」も公開された。これらの作品タイトルの発音はいずれも長崎の伝統行事と同じ「ショーローナガシ」であった。「ショーリョーナガシ」と読まれないようにするためか，多くの場合そのタイトルの「精霊」の部分には「しょうろう」のルビがふってあった**（資料2）**。

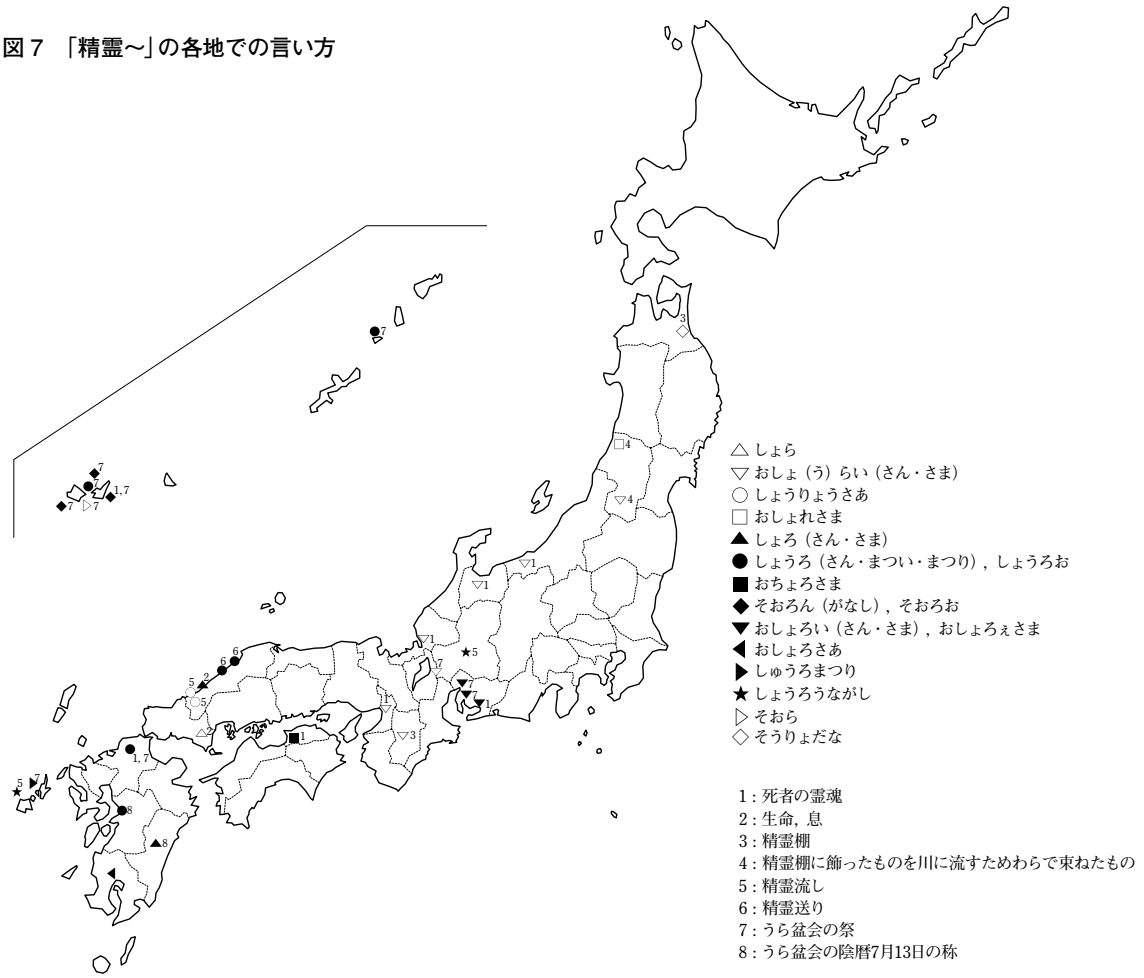
今回の調査で，「精霊流し」を「ショーローナガシ」と読む人が全体では7割以上いて，特に30～50代では8割を超えているという背景の一つには，この，さだまさし氏の作品「精霊流し」の影響が大きいのではないだろうか。現在

資料２

NHKドラマ「精霊流し」のホームページ。タイトルには「しょうろう」のルビがある。
http://www.nhk.or.jp/drama/archives/syoro/

50代の人たちは，フォークソング「精霊流し」がヒットしたときに10代後半から20代前半の青春時代を過ごした。また，この曲はさだまさし氏の代表的なヒット曲として1974年以降もたびたびメディアに登場している。さらに，2002年，2003年にドラマ化・映画化されたときには，さだまさし氏の歌う「精霊流し」がその主題歌として流された。こうしたことから1974年のヒット当時に実際に耳にした年代以外の人も接触することとなったのではないだろうか[18]。

図７ 「精霊～」の各地での言い方



3.3.「ショーローナガシ」7割の背景 ～仮説② 方言・地方の呼び名からの影響～

もう一つ，「ショーローナガシ」が多い背景としてあげられる要素として，方言からの影響がある。**図7**は『日本国語大辞典 第2版』と『現代日本語方言大辞典 第6巻』(1993) をもとに各地での言い方をまとめたものであるが，西日本を中心に「精霊」の「霊」の部分を「ロ」「ロー」「ロイ」「ロン」などと発音する地域が多数あることがわかる。日本新聞協会が発行する『放送で気になる言葉 改訂新版』(2003) では，「精霊」の読み方について掲載した項目で，これらの呼び名について次のように記している。

> 「「精霊船」「精霊送り」「精霊流し」「精霊会」「精霊棚」などは一般に「ショーリョー」。ただし，独特の呼び方をする地方ではその呼び方に従ってよい。」

実際，これまでのNHKのニュース原稿を調べてみると，長崎の「精霊流し」の「ショーローナガシ」はもちろん，神奈川県三浦市のお盆の行事でも「オショ（ー）ロナガシ」が使われていたり，阪神淡路大震災で犠牲になった人の霊を慰めるために淡路島で行われた「精霊流し」も「ショーローナガシ」と呼んで放送していた。

また，盆に迎えた死者の霊や供物を川や海に流す各地の習俗のなかには，灯籠を流すところもあることからその行事を「灯籠流し（トーローナガシ）」と呼んでいる地域もある[19]。この「トーローナガシ」という呼び名があることも，「精霊流し」を「ショーローナガシ」と言う人が多いことに影響を与えてはいないだろうか。

日本各地に残る伝統的な民俗行事「精霊流し」は，観光行事として発展するものもある一方で，海や川の汚染の問題から川の下流で精霊船や灯籠を回収するところもあり，時代とともにその姿が変わっているが，その発音もまた，メディアや他地域の方言からの影響を受けてゆれが起こっているものと考えられる。

4. 外来語 ～語末の長音のゆれ～

4.1. 辞書のゆれ，発音のゆれ，表記のゆれ

今回の調査では，外来語の語末の長音のゆれについて，下記の3語を調査した。以下に，『NHKアクセント辞典』での扱いとともに示す。

「チータ／チーター」

> 『NHKアクセント辞典』(1943) (1951) (1966)
> 掲載なし
> 『NHKアクセント辞典』(1985) (1998)
> チータ

「ジャージ／ジャージー」

> 『NHKアクセント辞典』(1943) (1951)
> 掲載なし
> 『NHKアクセント辞典』(1966) (1985) (1998)
> ジャージー〔衣〕[20]

「ワイヤ／ワイヤー」

> 『NHKアクセント辞典』(1943)
> 掲載なし
> 『NHKアクセント辞典』
> (1951) (1966) (1985) (1998)
> ワイヤ

これらの語が，主な辞書でどのように掲載されてきたかも見てみる（**表5～7**/p.25表8）。「チータ／チーター」は昭和30年代の初出以降，現代に至るまでゆれている[21]。「ジャージ／ジャージー」はほとんどの辞書で「ジャージー」が採られていて，ごく一部の辞書が「ジャージとも」という形で掲載している。一方，「ワイヤ／ワイヤー」は，ほとんどの辞書が主見出しとして掲載するのは「ワイヤ」ではあるものの，「ワ

イヤーとも」という形で両方を併記する扱いをしている。

表5　チータかチーターか
（辞書類での扱い／全58冊）

	戦前・戦中	戦後昭和	平成
チータ	0 [0]	7 [5]	9 [5]
チーター	0 [0]	4 [4]	10 [8]

表6　ジャージかジャージーか
（辞書類での扱い／全58冊）

	戦前・戦中	戦後昭和	平成
ジャージ	0 [0]	4 [3]	3 [1]
ジャージー	1 [1]	9 [9]	12 [12]

表7　ワイヤかワイヤーか
（辞書類での扱い／全58冊）

	戦前・戦中	戦後昭和	平成
ワイヤ	4 [4]	11 [11]	12 [12]
ワイヤー	2 [2]	5 [0]	10 [0]

※数値は，その語形が掲載されている辞書の数。
カギカッコ（[ ]）内は，そのうち主見出しでの掲載数。（詳細は表1の欄外参照）

このように，外来語の語末の長音はゆれが生じやすい。ゆれが生じる理由としては，長音をはじめとする特殊拍や無声拍が語末に位置する場合には「1拍」として数えられにくいことなどがあげられている（塩田雄大（1999））ほか，原語やアクセントとの関係もある。よって，今後これらの語形を確定するためにはその語の原語やアクセントも考慮に入れて検討する必要があるのだが，本稿ではそこには触れることなく調査結果のみを報告することにする。

また，外来語の語末の長音の「ゆれ」には，「発音のゆれ」と「表記のゆれ」とがあり，それらは必ずしも一致していない。例えば，以前から指摘されていた「コンピュータ／コンピューター」をはじめ，放送関係者の間で最近よく見られる「表記のゆれ」として「バラエティ／バラエティー」「ドキュメンタリ／ドキュメンタリー」などがあるが[22]，「コンピュータ」「バラエティ」「ドキュメンタリ」と表記する人が必ずしも表記のままに発音しているとは限らない，ということである。

ただし，NHKの放送では原則として発音は表記に一致させることにしているので[23]，これらの3語をNHKで放送する場合には，それぞれ発音も表記も「コンピューター」「バラエティー」「ドキュメンタリー」となる。また，『NHKアクセント辞典』では，表記はそのことばの発音を示すため，外来語の語形の確定はそのまま発音と表記の確定につながる。そのため，今回の調査および本稿では，表記と発音は一致させることを前提としている。

4.2. 結果は大揺れ「チーター」「ジャージ」「ワイヤー」が8割

以下，調査結果を示す。3語とも，現行の『NHKアクセント辞典』に掲載されている語形とは異なるものが8割以上となる結果となった。

「動物園で（チータ／チーター）を見た。」
チータ・・・・・・・・・・・19%
チーター・・・・・・・・・・81%

「学校の体操着のことを
（ジャージ／ジャージー）とも言う。」
ジャージ・・・・・・・・・・84%
ジャージー・・・・・・・・・15%

「（ワイヤ／ワイヤー）で固定する。」
ワイヤ・・・・・・・・・・・12%
ワイヤー・・・・・・・・・・87%

これらの結果を年代別にしたものが**図8～10**である。いずれの語も，多数派の「チーター」「ジャージ」「ワイヤー」が，他の年代に比べると高年層でやや低めであるという結果となった。「チータ／チーター」では，50歳以上の高年層では25%前後の人，つまり4人に1人が「チータ」と言っており[24]，「ジャージ／ジャージー」「ワイヤ

／ワイヤー」では60歳以上の年代ではおよそ4人に1人が「ジャージー」「ワイヤ」と言っているということになる。外来語の語末の長音については，高年層において他の年代とはやや異なるという傾向があるのかもしれない。

図 8　チータかチーターか（年代別）

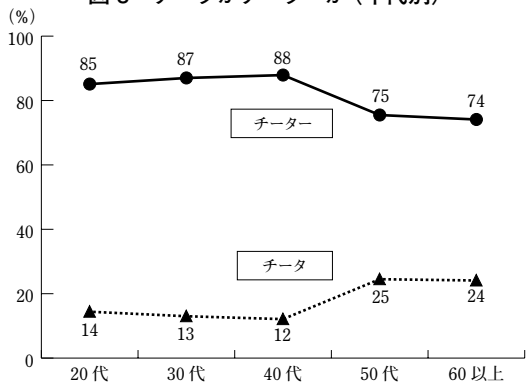


図 9　ジャージかジャージーか（年代別）

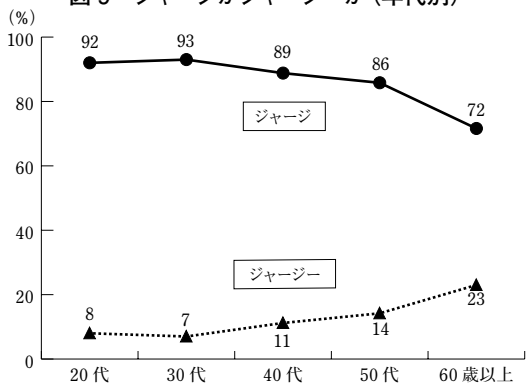
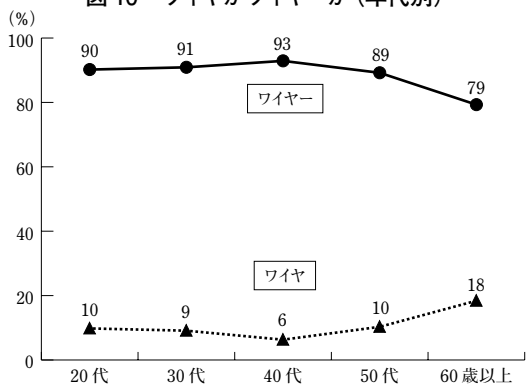


図 10　ワイヤかワイヤーか（年代別）



5. 終わりに

以上，先月号に続き，今年2月に行った語形のゆれに関する調査の結果について，辞書調査や『NHKアクセント辞典』における扱いの変遷とともに報告してきた。漢字語の読み方のゆれでは「乳離れ」「初産」「精霊流し」の3語について取り上げたが，その語がゆれている理由はそれぞれに違っているものの，どれも，時代的・社会的な影響を大いに受けてそれぞれの方向に変化をしているという，非常に興味深い結果となった。

また，外来語の語末の長音については，若干の年代差が見られた。これは，時代の移り変わりによって語形が変化したために年代によって使い方が異なっているという結果なのか，それとも，その外来語にどのくらい接しているかというなじみ度によるものなのか，今回の分析では明らかにすることができなかったが，前述した「コンピュータ」「バラエティ」「ドキュメンタリ」という表記が，IT関係の専門家や，放送関係者の人たちに多いこととなんらかの関係があるのかどうかなど，気になるところである。こうした点については今後の課題としたい。

『NHKアクセント辞典』の改訂は，今のところ2013年を目指して作業を進めているが，アクセントの検討は言うにおよばず，語形の確定だけでも相当数の語についての調査・検討が必要となる。すべての語について今回のような調査・分析ができるわけではないが，時代の変遷とともに変化していく日本語の，今の時代の形を記録するとともに，新しい時代の放送にふさわしいことばを提示する辞典となるよう，今後も改訂に向けて調査・分析・選定の作業を進めていきたい。

（おおた まきえ）

注：

1）本稿で報告する調査語が，17 世紀以降に出版された主な辞書においてどのような読み方で掲載されてきたかをまとめたもので，その語の発音が時代によってどのように変化してきたかを知る一助となる。

2）「チチバナレ」をカッコ付きで掲載するようになった経緯の詳細については不明。少なくとも放送用語委員会での決定はない。

3）調査の形式および本稿の集計方法については，先月号の注 3）を参照。

4）地域差についての考え方は先月号の注 4）を参照。

5）「Ablactatio」は『医学類聚』の原文ママ，ラテン語か。現在の英語では「Ablactation」。

6）一方，戦前の代表的な家庭百科辞典だと言われている『婦人家庭百科辞典』（1937（昭和 12）年）では，「ちばなれ（乳離れ）」「離乳」の両方が掲載されているものの，主見出しは「ちばなれ」で，「離乳」の項目は「「ちばなれ」（乳離れ）を見よ」であった。昭和 12 年当時はまだ，一般的には「ちばなれ」のほうがより使われていたと想像できる。

7）『離乳と離乳食（主婦の友シリーズ 38）』（1961）より引用。この書の「離乳ということば」には当時の「離乳」ということばをめぐる状況がよくわかる一節があるので下記に引用する。

「わが国では，昔は牛乳を使う人工栄養という方法がなかったので，母乳栄養から母乳以外の食事に移ること，いいかえれば，そのことばどおり，乳ぶさから離れることが「乳ばなれ」だったわけです。しかし現在では，人工栄養の場合もふくめて，離乳と呼んでいることは，すでにご存じのことと思います。この離乳ということばの内容が，昔からばく然としていたため，保育にたずさわっている医師も，保健婦も，看護婦も，さらに保育の第一の責任者である母親も，何かと不便を感じていました。そこで，昭和 33 年 4 月，文部省離乳研究班が次のような定義を作りました。（以下，p.14 の「離乳」の定義。略）」

また，遠城寺宗徳（1961）は，「わが国では，離乳という言葉はもともと母乳栄養児を対象として使われ，主として母乳の断乳の意味に用いられて来た（中略）。同研究班の定義によれば（中略）離乳の完了とは「主な栄養源が乳汁以外の食物になること」であって，母乳の断乳を伴うことは定義には入られなかった」（下線，筆者）と記している。P.25 表 8 の辞書調査結果一覧と，各辞書による「離乳」の語釈は，これらの記述内容を裏付ける内容でありたいへん興味深いが，これについては別稿で改めて詳述することにしたい。

8）「断乳」は p.25 表 8 のとおり明治時代から使われていたことばとして辞書に載っていたが，「離乳」が登場するとともに姿を消し，平成 10 年代になって再び登場するようになった。

これらのことばについて，中尾優子ほか（2001）では，「「乳離れ」は，母親の乳首への吸いつきをやめることであり，この「乳離れ」には，児以外の意思，主に母親の意思が働いて児が乳首から離れる「断乳」と，児の意思が尊重され児の意思で離れていく「卒乳」が存在する」としている。また「「離乳」は，栄養学的・発育学的な視点からの食べ物を噛みつぶすことができるようになるまでの体の発達を含めた食の自立過程を表す」としている。

9）母子健康手帳が昭和 51 年に改定されて以降は，「1 歳健康診査」「1 歳 6 か月健康診査」のページに「断乳」の完了を確認する欄が設けられた。しかし，1 歳以降も無理に母乳をやめさせる必要はないとする考え方が主流になってきたことなどから平成 14 年度以降の母子健康手帳からは「断乳」の記載がなくなった。

10）『NHK アクセント辞典』の 1951 年版と 1966 年版では「ウイザン」と「ハツザン」は別個の主見出しとして掲載されていた。一方，1985 年版以降は，主見出し「ウイザン」に「ウイザン　ハツザン」の順で 2 つの読みが掲載され，主見出し「ハツザン」にも「ハツザン　ウイザン」の順で 2 つの読みが掲載されるようになり，どちらを引いても「初産」には両方の読みがあるとわかる掲載様式になった。

11）「初孫（ウイマゴ／ハツマゴ）」について，NHK では「○ウイマコ゜○ハツマコ゜」（「゜」は鼻濁音を表す）としたうえで，「ウイマコ゜…昔風の言い方，ハツマコ゜…現代風の言い方」としている。また，この語については過去に調査をした結果がある。有識者・大学生・高校生・NHK アナウンサー（計 820 人）を対象に「発音のゆれアンケート」（1983 年 12 月から 1984 年 1 月）で，結果は，比較的高年層の多い有識者が「ウイマゴ 43%，ハツマゴ 57%」であったのに対し，若年層の大学生と高校生はそれぞれ「ウイマゴ 24% ·14%，ハツマゴ 76%·86%」であった（菊谷彰（1984））。

12）「「初孫」の読み」の項目（p.354 ～ 355）に掲載。

13）1937（昭和 12）年発行の『婦人家庭百科辞典』にも「しょさん（初産）」「しょさんぷ（初産婦）」の見出し語がある。このうち「しょさんぷ（初産婦）」の語釈には，「（略）。初産婦は経験のないために小児に対して必要以上の心配をし，また恐怖し，精神過労に陥り，ために乳分泌を障碍する。或は全く誤った産褥処置及び育児方法を取ることがあるから，経験ある医師または産婆に一切を委ね，その指導を受けて育児法を学ぶべきである」とある

14）国立国会図書館ホームページの蔵書検索・申込システム（NDL - OPAC）にはそれぞれの書籍の読みを記してあるが，これは出版元が指定した読みではなく国立国会図書館がデータ入力時につけたものであるので，ここでは触れない。

15）日本の妊産婦死亡率（出生数 10 万に対する年間の妊産婦死亡数）と妊産婦死亡頻度（年間の出生数÷妊産婦死亡数）は下記のとおり。

1900（明治 33）年：436.5
（妊産婦死亡頻度 1/229）
1950（昭和 25）年 ：176.1 （1/568）
1970（昭和 45）年 ： 52.1 （1/1919）
1990（平成 2） 年 ： 8.6 （1/11634）
2008（平成 20）年 ： 3.6 （1/27978）

（中井章人（2008）および『母子保健の主なる統計』をもとに再計算）

また，1 人の女性が一生のうちに生む子どもの数の指標となる「合計特殊出生率」は，2009（平成 21）年は 1.37 で 2008 年と同数値であった。

16）『日本国語大辞典 第 2 版』には，このほかに「精霊蝽蛉（ショーリョートンボ），精霊飛蝗（ショーリョーバッタ），精霊蜻蛉（ショーリョーヤンマ）」が掲載されている。『日本民俗大辞典 上』（1999）の「精霊」の項には，「精霊はトンボやセミやカマキリに乗って訪れると伝えるところもある」とあるがこれと関係があるかどうかまでは確認できなかった。

17）「精霊流し」は，さだまさし氏が 1972 年に結成したフォーク・デュオ「グレープ」の 2 枚目のシングルとして発表。

18）NHK のドラマ「精霊流し～あなたを忘れない」は，30 ～ 50 代の女性をターゲットとして 2002 年に新設された午後 11 時台の連続ドラマ枠で放送された（『NHK 年鑑 2003』）。また，NHK 放送文化研究所が行った「平成 14 年 11 月全国個人視聴率調査」によると，ドラマ「精霊流し～あなたを忘れない」は，40 代女性を中心とする 20 代～ 60 歳以上の各年代に視聴されていた（視聴率グループ・NHK 文研世論調査部（2003））。

19）国語辞書の中には，見出し語「精霊流し」の語釈に「盆の十三日に迎えた精霊が十五（十六）日に冥界に帰るのを送ること。灯籠流し。」（『新明解国語事典 第 6 版』。下線は筆者）と掲載しているものもある。

20）「ジャージ／ジャージー」（jersey）ということばは，①細い糸でメリヤス編みにした生地，②その生地を使った運動着，③イギリスのジャージー島原産の乳牛，の意味で使われるが，『NHK アクセント辞典』では 1966 年版以降の各版で「ジャージー〔衣〕」と記載し，「衣料・服飾」関連の語として載せている。

21）ただし，動物の図鑑などでは「チーター」の表記で定着しているようである。1960 年代以降に出版された動物図鑑・動物百科などの書籍を筆者が調べた限りでは「チータ」と掲載したものは確認できなかった。

22）在京キー局の民放各社および NHK のホームページでは，いずれも「バラエティ」と表記。また，テレビ朝日が 2008 年から放送している番組は「報道発 ドキュメンタリ宣言」である。

23）NHK の放送における「外国語・外来語の表記」の基本方針と原則は，『NHK ことばのハンドブック 第 2 版』（p.221 ～ 231）に掲載。その中で，発音については「原則として発音は表記に一致させるものとする」としている。

24）1964（昭和 39）年にデビューし現在も活躍中の歌手・水前寺清子氏の愛称は「チータ」（本名が「民子（たみこ）で，「小さいたみちゃん」に由来」）。今回の調査で，他の年代より「チータ」が多かった高年層は，この愛称「チータ」を実際に言っていた世代であるとも考えられるが，これについては今後の課題としたい。

引用文献

・遠城寺宗徳（1961）「離乳とは」『離乳』遠城寺宗徳編 永井書店
・菊谷彰（1984）「「発音のゆれアンケート」から」『放送研究と調査』1984 年 6 月
・塩田雄大（1999）「音韻構造からみた「外来語の平板化」～コロッケは平板化するか？～」（「『日本語発音アクセント辞典』～改訂の系譜と音韻構造の考察～」内）『NHK 放送文化調査研究年報』No.44
・視聴率グループ・NHK 文研世論調査部（2003）「テレビ・ラジオ視聴の現況－平成 14 年 11 月全国個人視聴率調査から－」『放送研究と調査』2003 年 3 月
・中井章人（2008）「周産期における救急医療について（妊産婦死亡統計と高次周産期医療施設の現状）」http://www.jaog.or.jp/know/kisyakon/16_081110.pdf
・中尾優子ほか（2001）「「卒乳」…乳離れ・離乳・断乳との概念関係に関する一考察…」『長崎大学医学部保健学科紀要』14 巻 2 号
・『言葉に関する問答集 総集編』（1995）文化庁
・『放送で気になる言葉 改訂新版』（2003）日本新聞協会
・『離乳と離乳食（主婦の友シリーズ 38）』（1961）浅野秀二著 主婦の友社

表8　辞書調査一覧

	辞書名・出版社・発行年				乳離れ		【参考】離乳	【参考】断乳	【参考】卒乳	初産				精霊流し		チーター		ジャージー		ワイヤー	
	調査語（発音）				チチバナレ	チバナレ	リニュー	ダンニュー	ソツニュー	ウイザン	ショサン	ショザン	ハツザン	ショーリョーナガシ	ショーローナガシ	チータ	チーター	ジャージ	ジャージー	ワイヤ	ワイヤー
1	日葡辞書	長崎版	（江戸時代）	1603	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・*	・	・	・	・	・	・	・
2	和英語林集成 初版・再版・3版	日本横浜		初版 1867/ 再版 1872/3 版 1886	・	◎	・	・	・	◎	・	・	・	・*1	・	・	・	・	・	・	・
3	和独対訳字林（レーマン）	日比谷・加藤	明 10	1877	・	◎	・	・	・	◎	・	・	・	・*1	・	・	・	・	・	・	・
4	漢英対照いろは辞典	国文社	明 21	1888	・	◎	・	◎	・	・	・	・	・	・*	・	・	・	・	・	・	・
5	私版日本辞書言海	大槻文彦	明 22 ～ 24	1889	・	◎	・	□	・	◎	・	・	・	・*	・	・	・	・	・	・	・
6	日本大辞書	明法堂	明 25	1892	・	◎	・	・	・	◎	・	・	・	・*	・	・	・	・	・	・	・
7	日本大辞林	宮内庁	明 27	1894	・	◎	・	・	・	・	・	・	・	・*	・	・	・	・	・	・	・
8	日本大辞典	博文館	明 29	1896	・	◎	・	・	・	◎	・	・	・	・*	・	・	・	・	・	・	・
9	和英大辞典（ブリンクリー）	三省堂	明 29	1896	・	◎	・	□	・	◎	・	・	・	・*	・	・	・	・	・	・	・
10	言海（縮刷, ちくま学芸文庫版）	六合館	明 37	1904	・	◎	・	□	・	◎	・	・	・	・*	・	・	・	・	・	・	・
11	和仏小辞典（ルマレシャル）	三才社	明 37	1904	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・*1	・	・	・	・	・	・	・
12	ことばの泉 日本大辞典	大倉書店	明 41	1908	・	◎	・	◎	・	◎	・	・	・	・*	・	・	・	・	・	・	・
13	俗語辞海	集文館	明 42	1909	・	◎	・	□	・	◎	□	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
14	新訳和英辞典（井上十吉）	三省堂	明 42	1909	・	◎	・	・	・	・	・	・	・	・	・*	・	・	・	・	・	・
15	辞林（辭林） 改訂版	三省堂	明 44	1911	・	◎	・	□	・	◎	・	・	○	・*	・	・	・	・	・	・	・
16	辞海	郁文社	大 3	1914	・	◎	・	・	・	◎	・	・	△	・*	・	・	・	・	・	・	・
17	大日本国語辞典	冨山房	大 4 ～ 8	1915	・	◎	・	・	・	◎	△	・	○	・*	・	・	・	・	・	・	・
18	新式辞典（芳賀矢一）	大倉書店	大 11	1922	・	◎	・	□	・	◆*	・	・	△	・*	・	・	・	・	・	・	・
19	スタンダード和英大辞典	大阪寶文館，東京寶文館，同文館	大 13	1924	・	◎	・	・	・	◎	・	・	◎	・	・	・	・	・	・	・	・
20	ローマ字で引く国語辞典	冨山房	大 14	1925	・	◎	・	□	・	◎	・	□	□	・*	・	・	・	・	・	・	・
21	広辞林（廣辭林） 7 版	三省堂	大 15	1926	・	◎	・	□	・	◎	△	・	□	・*	・	・	・	・	・	・	・
22	日本大辞典 言泉	大倉書店	昭 2	1927	・	◎	・	△	・	◎	△	・	△	・*	・	・	・	・	・	・*1	・
23	小辞林	三省堂	昭 3	1928	・	◎	・	□	・	□	△	・	□	・*	・	・	・	・	・	・	・
24	NEW 斎藤和英大辞典	日英社	昭 3	1928	△	◎	・	・	・	◎	・	・	◎	・	・	・	・	・	・	・	・
25	研究社新和英大辞典	研究社	昭 6	1931	△	◎	◎	・	・	◎	・	・	◎	・*	・	・	・	・	・	・	◎
26	改修新式辞典（芳賀矢一）	大倉書店	昭 6	1931	・	◎	・	△	・	◆*	・	・	△	・*	・	・	・	・	・	・*2	・
27	国語発音アクセント辞典	厚生閣	昭 7	1932	・	◎	・	・	・	◎	・	・	・	・*	・	・	・	・	・	・	・
28	大言海	冨山房	昭 7 ～ 10	1932	・	◎	△	□	・	◎	□	・	△	・	・	・	・	・	・	・	・
29	大辞典	平凡社	昭 9 ～ 11	1934	・	◎	◎	△	・	◎	◎	・	○	◎	・	・	・	・	◎*1	・	・
30	辞苑	博文館	昭 10	1935	・	◎	◎	□	・	□	△	・	◎	・*	・	・	・	・	・	◎	・
31	増補新辞典	至文堂	昭 10	1935	・	・	・	・	・	◎	△	・	○	・*	・	・	・	・	・	・	◎
32	アクセント表示　新辞海	三学社	昭 13	1938	・	□	◎	・	・	◎	△	・	◎	・*	・	・	・	・	・	◎	・
33	言苑（戦前版）	博文館	昭 13	1938	・	・*	◎	・	・	◎	◎	・	◎	◎	・	・	・	・	・	◎	・
34	言苑	博友社	昭 15	1940	・	・*	◎	・	・	◎	◎	・	◎	◎	・	・	・	・	・	◎	・
35	標準日本語発音比較辞典	興南新聞社出版部	昭 16	1941	・	・	・	・	・	・	◎	・	・	・*	・	・	・	・	・	・	・
36	小言林	全国書房	昭 24	1949	・	◎	◎	・	・	◎	□	・	◎	◎	・	・	・	・	・	◎	・
37	言苑（戦後版）	博友社	昭 24	1949	・	・*	◎	・	・	◎	◎	・	◎	◎	・	・	・	・	・	◎	・
38	明解国語辞典改訂版	三省堂	昭 27	1952	・	◎	◎	・	・	◎	◎	・	◎	◎	・	・	・	◎*2	◎*2	◎	・
39	角川国語辞典　30 版	角川書店	昭 32	1957	・	□*	◎	・	・	◎	・	◎	□	・*	・	・	・	・	◎	◎	・
40	三省堂国語辞典　初版	三省堂	昭 36	1961	△	◎	◎	・	・	◎	□	◎	◎	◎	・	◎*	◎*	◎*3	◎*3	◎	□
41	広辞苑　初版	岩波書店	昭 38	1963	・	◎	◎	・	・	◎	△	□	◎	◎	・	◎	・	・	◎	◎	・
42	岩波国語辞典　初版	岩波書店	昭 38	1963	・	◎	◎	・	・	◎	◎	・	◎	◎	・	◎	・	・	◎	◎	・
43	新明解国語辞典　初版	三省堂	昭 47	1972	・	◎	◎	・	・	◎	◎	□	◎	◎	・	(□)	◎	・	◎	◎	□
44	日本国語大辞典	小学館	昭 47 ～ 51	1972 ～ 1976	○	◎	◎	・	・	◎	□	◎	◎	◎	□*	(□)	◎	□	◎	◎*3	□
45	三省堂国語辞典　3 版	三省堂	昭 57	1982	・	◎	◎	・	・	◎	□	◎	△	◎	・	◎*	◎*	◎*3	◎*3	◎	□
46	広辞林　6 版	三省堂	昭 58	1983	○	◎	◎	・	・	◎	△	□	◎	◎	・	◎	・	・	◎	◎	□
47	新潮国語辞典　第 2 版	新潮社	平 7	1995	□	◎	◎	・	・	◎	・	◎	◎	◎	・	・	◎	・	◎	◎*3	□
48	大辞泉　増補・新装版	小学館	平 10	1998	○	◎	◎	・	・	◎	□	◎	◎	◎	□*	□	◎	・	◎	◎	□
49	岩波国語辞典　6 版	岩波書店	平 12	2000	・	◎	◎	・	・	◎	◎	・	◎	◎	・	◎	□	・	◎	◎	□
50	日本国語大辞典 2 版	小学館	平 12	2000	○	◎	◎	・	・	◎	□	◎	◎	◎	□*	□	◎	□	◎	◎*3	□
51	新潮現代国語辞典 2 版	新潮社	平 12	2000	□	◎	◎	・	・	◎	・	◎	◎	・*	・	◎	・	・	◎	◎*3	□
52	明鏡国語辞典	大修館書店	平 14	2002	□	◎	◎	・	・	◎	◎	□	◎	◎	・	□	◎	・	◎	◎	□
53	新和英大辞典　第 5 版	研究社	平 15	2003	◎	△	◎	◎	◎	◎	・	△	◎	◎	△	◎	・	・	◎	◎	・
54	新明解国語辞典　6 版	三省堂	平 17	2005	・	◎	◎	・	・	○	◎	□	◎	◎	・	◎	□	□	◎	◎	□
55	大辞林 3 版	三省堂	平 18	2006	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	□	◎	◎	・	□	◎	・	◎	◎	・
56	角川国語辞典　新版　416 版	角川書店	平 19	2007	□*	◎	◎	・	・	◎	◎	・	◎	◎	・	・	◎	・	◎	◎	□
57	広辞苑　6 版	岩波書店	平 20	2008	△	◎	◎	◎	・	◎	◎	□	◎	◎	・	・	◎	・	◎	◎	□
58	三省堂国語辞典　6 版	三省堂	平 20	2008	○	◎	◎	◎	◎	◎	□	◎	△	◎	・	◎*	◎*	◎*3	◎*3	◎	□
①	NHK アクセント辞典（1943）	NHK	昭 18	1943	・	◎	◎	・	・	◎	・	・	・	◎	・	・	・	・	・	・	・
②	NHK アクセント辞典（1951）	NHK	昭 26	1951	・	◎	◎	・	・	◎	・	・	◎	◎	・	・	・	・	・	◎	・
③	NHK アクセント辞典（1966）	NHK	昭 41	1966	(◎)	◎	◎	・	・	◎	・	・	◎	◎	・	・	・	・	◎	◎	・
④	NHK アクセント辞典（1985）	NHK	昭 60	1985	(◎)	◎	◎	・	・	◎	・*	・	◎	◎	・	◎	・	・	◎	◎	・
⑤	NHK アクセント辞典（1998）	NHK	平 10	1998	(◎)	◎	◎	・	・	◎	・*	・	◎	◎	・	◎	・	・	◎	◎	・
	備　考				□*:「離乳」の語釈に掲載	・*:「チバナレ」「チバナレ」はあり □*:「チバナレ」の語釈に掲載				◆*:見出し語「ウイ」に掲載	・*:「初産婦」はあり			・*:「精霊ショーリョー」「精霊会ショーリョー」などはあり ・*1:漢字表記「生霊ショーリョー」はあり	・*:「精霊ショーロー」はあり □*:「ショーロナガシ」あり	◎*:見出し語「チータ(−)」	◎*:見出し語「チータ(−)」	◎*2:見出し語「ジャージ(イ)」 ◎*3:見出し語「ジャージ(−)」	◎*1:「乳牛」の意のみ ◎*2:見出し語「ジャージ(イ)」 ◎*3:見出し語「ジャージ(−)」	・*1:「ワイヤロープ」はあり ・*2:「ワイア」はあり ◎*3:「ワイア」もあり	

◎　見出しがあり，語釈も載っている。
○　見出しはあるが，語釈はなく「×××を見よ」「→×××」などとあり，またその対する語の中にも「○○○と言う」「＝○○○」などの形でその単語が載っている。
△　見出しはあるが，語釈はなく，「×××を見よ」「×××と同じ」「→×××」などとなっている。
□　その語の見出しはないが，対の調査語の中に「×××とも言う」「＝×××」などの形でその単語が載っている。
■　掲載はあるが，読み不明。
◆　見出し語はないが，他の語の中にあり，読みがわかる。
・　掲載なし
なお，「(◎)」は，括弧付きでの掲載を示す。